

「だって、言いつけられたとおりにするしか、ないじゃない」

「そうかもしれない。でも、そうでもないかもしれない」

浜田は大学の人事がどのへんまで話合いで決り、どのへんからさきが理事の考えで決るかをくどくと説明し、そして、自分でもよく判らなくなつた。結局、判つたのは、大学の職員人事というものがちっとも原則のない、いいかげんなもので、自分の就職にしてもそのおかげで可能だつたのだということである。彼は箸を置いた。そのとき陽子が言つた。

「会社や銀行だったら、転任なんて何でもないじゃない」

そして浜田は、東京の大学から高岡の附属高校へゆくのは、東京の本店から大阪の支店へ移るのとはせんせん違うことを説明しようとして、説明がうまくゆかなくなつてしまつた。もう東京へはぜつたい帰れないのだとおどかすことが、彼のただ一つの手であつた。妻ははじめて狼狽し、実家の母に頼んで堀川先生にお願いしてみようなどと言い、それを浜田に反対されると、でもまさか、そんなひどいことをするはずはない、とにかく高岡へ行つて、むこうで運動をつづければ、二年か三年で帰つて来られるのではないか、と呟く。それはどこまでも、会社員の転任から類推して考えているにすぎない。彼は説明に疲れて、次第に陽子のチューリングガムの音が細にさわつてきた。夫が食事しているときに、さらに転任の相談をしているときに、こんなものを噛んでいるのは無礼で軽薄で許せない。彼はそう思いながら、食卓の上に置いてある、赤と緑と白の紙に包まれ、さらに端にのぞいている銀紙で包まれたチューリングガムを見た。陽子がその視線を誤解した。彼女は一つを取り（そのあいだにも灰いろの塊りが、紅い唇と白い歯に囲まれた間のなかで、しばらく片方の

端にいるかと思うと、急にもう片方の端へ移る）彼に差しだした。彼は紙と銀紙をむき、白い板を口に入れ、嘔んだ。酒とお茶漬のあとの舌には、それは途方もなく甘つたる、厭らしくて、しかし甘さはゆっくりと薄れてゆく。浜田は、味のなくなった柔らかいものを噛みながら、とつぜん、もし阿貴子に相談したらどう言うだろうと考えた。陽子が陽子でなく、阿貴子だったら、もしほくが阿貴子と結婚していたら。あの宇和島の質屋の娘は、この東京の会社員の娘と違つて、長いものに巻かれて暮すのが当たり前のことだとは思つていなかつたような気がする。

川が海へ注ぐ近くには、何のためなのか、コンクリートの大きな立方体がたくさん、無造作に投げ込まれてあつた。雪だけ水といふことになるのだろう、山陰の四月の川水は冷たそうだ。宿の主人がかけてあるという鰐の掛けは、どのへんにあるのだろうか？ もちろん、一つや二つではきかないだろうけれど。向う岸の浅い緑のなかを、白い犬が走つてゐる。こちら岸にある一本の桜の木はちょうど花ざかりで、しかしながら朝の雨のせいですっかり冴えない色になつてゐる。土堤を散歩している杉浦は、皆生もこのへんに来ると気が休まると思い、それから、この温泉へ来たのはやはり失敗だったと心のなかで苦笑した。

やはり？ そう、やはりというのは正しかつた。鳥取の宿で相部屋になつた、太くて濃い眉毛の、記憶術の大ジメ師が、約一年半まえ大東亜戦争がはじまつてからは誰も記憶術なんかに関心を持たなくなつた、まあ、おれは英語ほどひどい目に会つたわけじゃないから、これも聖戦完遂のためと思つて我慢するしかないけれど、とさんざん愚痴をこぼした末、米子へゆくなら米子に宿をとる手はない、すぐ近くの皆生に泊るに限る、温泉はあるし、それに米子よりずっと安い、これからじや